

稲 山 会

通 信

第35号

2017年7月1日発行

発行人：斉藤雄二 発行所：稲門山の会事務局 TEL 03-3367-3723 FAX 03-3367-8150 ©稲門山の会1998

「早稲田大学山の会は元気にやっています」

今年の「稲山会通信」新年号に上田稲門山の会代表が「ビレー解除・登攀終了」を書かれ、長い間の「早稲田大学山の会の山岳活動のサポート」を後輩OB達に引き継ぎたいとのご意向を示されました。ここ過去の何年か「山の会」は会の存続で苦しんできました。ある年の新人募集は、現役学生1名、OB2名と言う様な年もありました。上田先輩は、その時でもさえ、例の人懐こさで学生の輪に潜り込み、「山の好きそうな学生」を何とかキャッチしてくる・・・その手口とか・説得力とか？・・・には脱帽でした。長い間、御尽力を戴きまして大変有難う御座いました。

大学生の登山活動が衰退気味になるにつれて、「もう山登りは若者に魅力あるスポーツではない」とか「未踏峰がなくなったヒマラヤは魅力ある山域ではない」とか色々と言われてきました。確かに昔の山登りと比べると山の登り方、山の意識等が大きく変わってきています。山の装備、登攀用具も各段に進歩し、天幕、ザック、登攀用具等も軽量化されています。ひと昔前の様に夏山合宿の重い装備が10kg以上も軽量化され、山小屋への荷揚げも全てヘリで行う時代となりました。しかし大学生の山登り・探検もそれなりの「かたち」で生残り、各大学山岳部は、昔ほど部員数は多くはないが、一定数の学生が入部してくる、特に地方大学山岳部の入部者が多いのが特長です。また大学の一般的な山岳クラブも、早稲田大学の場合6～7グループあり、50～60名くらいの会員がいるクラブも多いのが特長ですが、実登山活動は殆ど夏山に限定されています。更に最近の山登りの傾向は、2020年東京オリンピックのスポーツクライミング採用の影響か、本来の山登り（アルパイン登山）に興味を持たず、スポーツクライミングしかやらない学生が多くなり、古い山岳部OBを嘆かせています。また日本山岳会の中に大学山岳部とは別組織の「ユースクラブ」があり、専属コーチに指導を受けている若者も多く、この若者達が経験を積み、インドヒマラヤ、東南チベットヒマラヤ等の未踏峰に出掛けています。若者はバラエティーに富んだ形で山登り・クライミング・探検を実現しています。

今年の「山の会」も新入会員が10数名入会しております。今年は現役学生の実力にあった山登りと安全な山登りを目指しております。これからもOB・OGの皆様のサポートをお願い申し上げます。

今年の稲門山の会の役員は次のメンバーです。宜敷くご支援の程をお願い致します。

井村英明（代表/S40）、斉藤雄二（副代表/S41）、金子治雄（副代表/S41）、新井昭夫（会計/S46）、島田弘康（広報・HP/S46）、松村幹雄（行事/S48）、常数英昭（企画/S49）、倉川秀明（行事/S51）、名達一彦（事務局/S51） ＊また役員は現役学生のコーチを兼務しています＊

2017年7月 稲門山の会代表 井村英明

2017 年稲門山の会総会・新年会報告

2017 年度の総会・新年会が、現役学生及び千露里庵倶楽部関係者を含む 55 名の参加を得て 1 月 28 日に大隈会館で盛大に開催されました。

2017 年度より新任となった井村代表の挨拶と役員の紹介・会計報告に続いて、迫田 OB (S43 卒) の講演があり、読売新聞社で運動部長として経験したヒマラヤ登山報道にまつわる裏話など興味深いお話をされました。

現役学生の紹介では、山の会では二人目の女性幹事長となる厚木さんを含む現役学生 8 名の紹介があり、それぞれが山登りに対する抱負などを力強く話してくれました。

懇親の場では久しぶりの再会に話も弾み、旧交を温めるなか予定時間の 3 時間は瞬く間に過ぎ、最後は全員で肩を組み校歌の大合唱で締めくくり、別れを惜しみつつ来年の再会を誓い合いました。



井村代表の挨拶



上田前代表による安全登山祈願



迫田 OB の講演風景



現役諸君が自己紹介し、登山の抱負などを熱く語ってくれました



山本 OB はファミリーで参加



懇親の場は大いに盛り上がりました



最後は肩を組んで校歌の大合唱



フレイフレイ「山の会」

総会出席者（敬称略）

S33 年卒	上田 OB
S35 年卒	小島、宮野各 OB
S36 年卒	清水、西山、荒川、山本(貴)各 OB
S37 年卒	加納、東、山本(道)、恩田、金子(弘)、篠原、村田、卯月、打矢各 OB
S38 年卒	栗又、松村(啓)、白倉、吉田各 OB
S39 年卒	枰、真下、三宅各 OB
S40 年卒	田野辺、笠原、梅崎、山崎、斎藤(洋)、長谷川、井村各 OB
S41 年卒	斉藤(雄)、金子(治)各 OB
S42 年卒	渡辺 OB
S43 年卒	佐久間、迫田、丹治各 OB
S46 年卒	島田、新井各 OB
S48 年卒	松村(幹)、箕打各 OB
S49 年卒	常数 OB
S50 年卒	小竹 OB
S51 年卒	倉川 OB
S53 年卒	米山 OB
H17 年卒	山本(達)OB ファミリー
H27 年卒	渡邊 OG

現役学生 真藤(前幹事長)、厚木(幹事長)、目次(副幹事長)、川上、佐藤、大津、小澤、吉野
 ゲスト 立田氏（千露里庵倶楽部）

島田弘康（S46 年卒）記

会員近況報告

－ 2017 年総会・新年会の「返信はがき」より －

◆清水正昭 (S33) 創立 60 周年記念祝賀会ではお世話になりました。80 代から 20 代までの 60 年の歴史を十分感じさせた賑やかな会でした。今夏も記念の T シャツを着て、志賀・戸隠、更に妙高高原を歩きたいと思っています。 ◆三浦郁代 (S34) T シャツ有難うございました。住所変更しました。宜しくお願いします。 ◆宮野準治 (S35) ぼちぼち。ただ機会を見て山に踏み入ることを考えています。勿論 RC は出来ませんが・・・ ◆加納孝治 (S37) 昨秋“徳澤園の夕べ”に参加。せめて涸沢へと思ったのですが、横尾本谷迄でした。“山は遠く、思い出のところ”になりました。上田代表はじめ、幹事諸兄・・・ありがとう御座いました。 ◆広瀬舜一 (S38) 60 周年の徳澤園・お世話になりました。大変楽しかったです。78 歳で乗馬を始めました。野山を馬で駆けめぐり、カナダやモンゴル、北海道を馬でトレッキングするのが夢です。今年 8 月頃に後立山の五竜・唐松縦走と年令に合った山登りをする予定・・・八十歳までは現役で山を登り続ける決意を固めています。 ◆梅田浩美 (S37) 80 才に突入し、ゴルフ、海外旅行も激減し、体力減を感じています。冠動脈 2 本のバイパス手術も 20 年間保ってきて、昨年からは像彫刻（木）を始めました。久々にボリュウムある会報を読ませて頂き、関係各位に感謝しています。上田先輩には入会以来お世話になっておきながら、恩返しも出来ず恐縮しております。 ◆竹内敏 (S37) 未だ仕事をしております。仕事も順調、体調もマアマアですので 80 歳で引退を考えています。あと 3 年頑張ります。 ◆打矢之威 (S37) ネパールのエベレスト・トレッキング山行の後、狭心症になり 5 月にステント設置手術を 2 回受け、現在静かにしています。 ◆古林美穂子 (S38) いつもお世話になっております。お陰様で、足だけは丈夫で気のむくまま散策しております。高校の同窓会とかち合いまして残念ながら欠席いたします。皆さまのご健康をお祈りいたします。 ◆平賀 守 (S38) 連絡、有難く感謝致します。小生 6 年前に脳梗塞を患い歩行困難です。リハビリに精を出し、2～3 年後には車椅子で（新年会に）参加したいと考えております。皆々様に宜しくお伝え下さい。（注：平賀 OB は 1962 年 3 月の積雪期鳥甲山初縦走のメンバーです。永年、音信不通でしたが、現在仙台市にお住まいです） ◆弘海都子 (S38) イタリアのドロミテ山塊やスイスのふもとなどを歩いてきました。歩きすぎて足が痛いです。年を感じました。今回は日がダブルなので、欠席させていただきます。皆様のご多幸をお祈りいたします。 ◆松村啓之亮 (S38) 山には行かぬものの元気です。新年会をはじめあらゆる WMS の活動・企画・実施にリーダーシップをとられる役員諸兄に感謝しています。 ◆真下健弥 (S39) 後期高齢者の仲間入りです。少しの仕事とボランティア、そしてゴルフを楽しんでいます。ボケ

防止に漢字検定を 28 日当日に受験してから（新年会）に出席します。 ◆井上昌代（S40）12 月には北海道で初滑りと元気で過ごしていますが、旧友の訃報が続き、「一期一会」を痛感することの多いこのごろです。50 年前、和田隊長のアフリカ遠征隊で果たせなかった南ア・喜望峰を昨年訪ねました。センチメンタル・ジャーニーですね。 ◆山崎征彦（S40）昨年 10 月より「目黒区シルバー人材センター」に入会し、地元の「禁煙パトロール」や「駅周辺掃除」、12 月からは「東京工業大学/検収センター」の納品処理業務が始まり、52 年振りの新人としてしごかれています。 ◆濱田政則（S41）先輩諸兄姉の御尽力によって、山の会が順調に発展して来ていること、有難く思っております。海外出張に重なりますので欠席させていただきます。 ◆海野俊男（S41）残念ですが、体調が十分でなく出席できません。会のますますの発展を祈念致しております。創立 60 周年記念の T シャツ有難うございます。 ◆佐久間正昭（S43）2016 年はスペインでの 1 ケ月の旅とマラソン大会出場などで少し山が縁遠くなりました。2017 年は国内の山を歩きたいと考えています。 ◆上原敏行（S43）夏に谷川岳に、9 月下旬に立山三山に登ってきました。涸沢の紅葉は 3 年間見てきましたが、立山の紅葉は初めて最後になると思います。 ◆神谷哲郎（S48）いつも御案内有難うございます。先約があり、欠席させていただきます。盛会を祈ります。2011 年丸紅を卒業し、縁を得た米国企業に勤務し、6 年目になりました。お蔭様で元気しております。3 人の孫の（全員男）の爺さんです。 ◆倉川秀明（S51）百姓となって今年で 10 年です。有機農法で野菜を作っています。来年度は稲門山の会の役員をおおせつかりました。微力ですが、どうぞよろしくお願い致します。 ◆柴原 至（S52）当日は所用があり欠席致します。昨夏の上高地・徳澤は楽しく過ごす事が出来ました。 ◆米山不器（S53）山はたまに丹沢大山に登る程度ですが、ウォーキングは毎朝 90 分程度やっています。 ◆今村梨沙（H27）Facebook や稲山会通信で後輩の頑張りをみて、いつも応援しています。新年会は大阪での研修のため行けません。残念です。これからも山の会を温かくサポートをよろしくお願い致します。私も会社の人たちとちょくちょく山に登っています。

（文責 役員会）



現役天覧山 RCT

金子治雄（S41 年卒）

北八天狗岳の雪山訓練山行を 1 週間後に控え、雪訓参加者の義務としている雪上でのザイルワークや岩稜縦走時の備えを学ぶために、3 月 5 日に亀田 OB の指導の下、天覧山で恒例の RCT を行った。現代はザイルと言わずにロープと言うが、厚木幹事長を除いて初めて参加する学生たちは、腰にハーネスを装着し、ヘルメットを被ってザイルを操りながら天覧山の岩を登り下りすると、普段の 2 本足で歩く山行とは別な趣を感じたようだ。亀田 OB の指導法も出色であった。学生は RCT に接する機会が少ないので、新歓時でも探検部の学生が参加したいと言っていた。

参加者

現役：厚木（3 年）、立島（3 年）、小澤（3 年）、利藤（3 年）

OB：上田（S33）、井村（S40）、金子（S41）、新井（S46）、島田（S46）、亀田（S52）



亀田 OB は教え方が上手である



朝から夕方まで反復練習を繰り返す



厚木



立島



小澤



利藤

八ヶ岳天狗岳雪上訓練山行

島田弘康 (S46 年卒)

3月13～15日に現役4人OB3人で八ヶ岳天狗岳にて雪上訓練山行を行った。1週間前に天覧山で実施したザイルワークトレーニングの成果が活き、充実した訓練山行を行うことができた。参加者は、現役4人(厚木、立島、小澤、利藤)およびOB3人(金子、新井、島田)の計7人。



黒百合平にて全員集合

3月13日(曇りのち雪)

11時に茅野駅に集合しジャンボタクシーにて渋ノ湯に向かう。渋御殿湯前で身支度を整えアイゼンを装着して12:15出発。登山指導所ポストに登山計画書を投函し、金子OBトップで登山開始。途中2回の小休止を挟み15:10黒百合平着。天幕設営。OBと腰を痛めている厚木はヒュッテ泊。



金子OBトップで黒百合平に向かう

3月14日(曇り時々晴れ)

黒百合ヒュッテ前の斜面にて滑落停止の訓練をした後、9:00金子OBトップで天狗岳に向かい、11:00東天狗岳到着。霧のため眺望は全くない。11:30下山開始し12:30黒百合平着。昼食後ヒュッテ前の斜面で雪上訓練(後半はザイルを使った確保等)。夕食後にテントに集合し、お茶・菓子にて交歓会。



黒百合ヒュッテ前の斜面で雪上訓練

3月15日(晴れ)

8:00～9:30まで天狗ノ奥庭をめぐり、擂鉢池斜面にて滑落停止・トラバース・新雪歩行の練習、岩稜帯にて岩稜歩行、ルートファインディング等の訓練を行い、最後にヒュッテ前斜面にて滑落停止の確認を行う。天幕撤収後、10:25黒百合平を出発し、八方台分岐での小休止を挟んで12:00渋ノ湯着。渋御殿湯の温泉に浸り汗を流す。茅野駅のそば茶屋にて反省会を兼ねて歓談。

本年の総会・新年会で迫田 OB に講演「ヒマラヤ取材のあれこれ」をお願いしましたが、講演内容を通信に載せたいと伝えたところ、以下の体験談をいただきました。（編集者注）

投稿 「夢の 8,000m ライン」

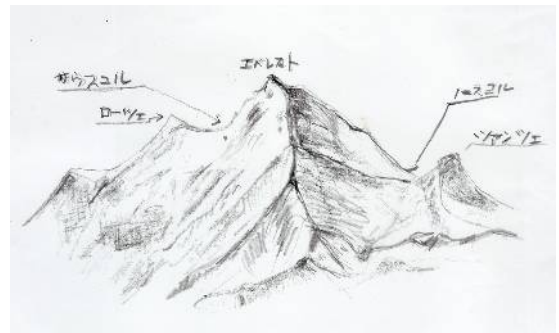
迫田泰敏（S43 年卒）

■ 1988 年日本・中国・ネパール エベレスト三国友好登山時の体験

ヒマラヤ登山の取材に何度も行っていると、隊員と同じように登ってみたいくなるのである。同行記者が一人の場合は、隊長のそばにいないと不都合が起こった時対応が遅れるが、複数の記者がいる場合は割合自由に動けるものだ。1988 年の日本・中国・ネパール三国友好登山の時は、何かやるには絶好のチャンスだった。



エベレスト（チベット側から）



記者はエベレストの南北に、2～3 名ずつ分かれて、私の行った中国側には 3 人もいた。おまけに私は責任を感じる必要もない 2 番手で、大学山岳部出の記者がキャップだったから尚更だ。私は一度、胃をおかしくした 4 月の初め BC に下りた。BC でのある日、医師の診察を受けると十二指腸潰瘍だったことがわかった。その時は医師が処方したガスターという薬が効いてすぐに治ったため、予定通り 8,000m ラインまで無酸素で行ってくる計画を実行することにした。

一度、ノース・コル（7,028m）まで行ったことがあるので、ABC（前進ベースキャンプ）に登って、翌日、コルまで上がった。重広恒夫登攀隊長は、ここで 1 ヶ月もいたのだから 7,000m 滞在のギネスものだろう。私もしばらくここに居て、上部を伺うことにした。まずこの高さに慣れることだ。

ABC からノース・コルまでの登りは、岩のごろごろした道を少し上ると雪田に出る。緩傾斜が続くが、さすが 6,500m を越える高さ、呼吸が苦しくなる。それで呼吸の間隔を長くすると、前へ進まない。やむを得ず、苦しくとも 5 回呼吸して 1 歩踏み出す形にした。だが、それも緩傾斜の時のみ。やがて 60 度近い傾斜の雪壁となると、そんな呼吸法は通用しない。ピッケルとユマール（登降器）を操って思い切り呼吸するが、最後は「ワァー」とか「コノヤロー」とか罵声を浴びせながら、体を思い切り使うと、突然のようにノース・コルに飛び出した。

ノース・コルの生活は億劫そのものだった。もっとも面倒なのがトイレ。靴を履くなど日常の所作だけでも時間がかかる。このためテントシューズのまま外へ出てトイレに赴く。滑ると落ちてしまいそうな中で、呼吸を整えてしなければならない。

食事も、歯をかみ合わせるだけで、呼吸が荒くなる。これも仕事のタバコを吸って「ハアハア」。続いて原稿書きになっても「ハアハア」。原稿をハンディトーカーで読むのも一苦労だ。特に長い時間は頭痛のタネ。「原稿は短め」だ。

そんな時、ノース・コルに上がってきた医師に「あなたは痩せているから、下痢したら一発だ。下りられなくなる。気をつけて」と忠告された。ところが、そう言っている矢先に下痢をしてしまった。脱力感が体を覆い、下りるのも一苦労だな、と思っていると、午後になって幾分楽になって、夕方になったら体力が回復した。

おかげで 8,000m はすっぱり諦め、仕事に専念することになった。



賑やかなノース・コル

■ 1995 年日本山岳会マカルー遠征時の体験

1995 年のマカルー (8,485m) は記者一人に加え、大学山岳部出の写真部員が一人ついて来た。部長は会社を出る時、「BC に居ろ」ときつい命令。上司とは可哀相なもので、遭難が怖いから上に行くなと言ひ、かといって原稿は必要だ。

この部長はヒマラヤ取材の経験者であるから、始末が悪い。部員が上部へ行くことが感情的に許せない。だが、若い写真部員は上部に行きたくて仕方がない。ある時、そんな隊員に絶好な話が舞い込んだ。登山隊長の重広恒夫さんとサーダー（シェルパ頭）のバルテンバが揃って第2キャンプに上がるというのだ。重広はエベレスト北壁の初登攀者、バルテンバは2次隊だが南西壁の初登攀者と、エベレストの南北の初登攀者をガイドに登るわけだ。



マカルー（チベット側から）

安心して C2 に行かせたが、翌日の新聞を見た部長が怒りの電話をかけてきた。新聞に載った写真には「写真は〇〇特派員第2キャンプで」と BC 以上に登った証拠を残した。もちろん怒りの電話は 30 分続いた。

だが、電話を通しての怒声は余り気にならないものだ。通訳の T 君が「第2キャンプまで行

きたい」といった時は、割合気軽に引き受けた。C2は頂上稜線が見えるとあつて行きたいと思っていた。BCは谷の底にあって毎日、谷を見ているばかりなのだ。しかもヒマラヤでの原則は1人では行動しない。一緒に行くメンバーは、私しかいなかった。部長に知られないで、C2往復は部長が会社に来る11時までに帰幕することだ。で逆算して午前零時に出発した。

谷筋の道は、まずガスに包まれた。時折、大岩が突然顔を出す。基本的には雪の上の踏み跡をたどる。いつの間にか傾斜が増したり、デブリの脇を登ったり。こちらが「ルートが違っている」と叫んでも、相手は若者。どんどん先へ行き、聞こえているかどうか。そのうち夜が明けて、C1を下にみて隣の山に取り付いているようだ。

私はやむを得ず、C1に下りてC1の食料倉庫から、BCで既に食い尽くしてしまったスペシャルを“盗ん”で下山した。朝日の中を帰幕すると11時30分前。11時になると部長の定時連絡の電話が高々と鳴った。



マカルーのベースキャンプ
にて村人と情報交換
左：迫田 OB、右：重広隊長

■ 本年総会・新年会時の講演時に、迫田記者の書かれた「1982年12月厳冬期のエベレスト初登攀後に消息をたった加藤保男」の記事が限定でしたが配布されました。この記事に関する迫田OBのコメントです。

加藤保男の記事は小生の最初の現地取材、それも一人だけで行きました。しかも後から追いかけてBCに入ったので、加藤とは現地で会わずじまいでした。無線で2～3度話したうちの取材でした。

条件が悪い中で、しかも最初の現地取材ということで、思い出深い遠征でした。このため帰国した後も遺族のところへ行ったり、葬式に出たり、取材だけでなく気を使いました。

講演に一つだけ記事を出そうと思った時、素直に加藤の記事が上がったわけです。

投稿 「私の岩登り」

亀田吉史 (S52 年卒)

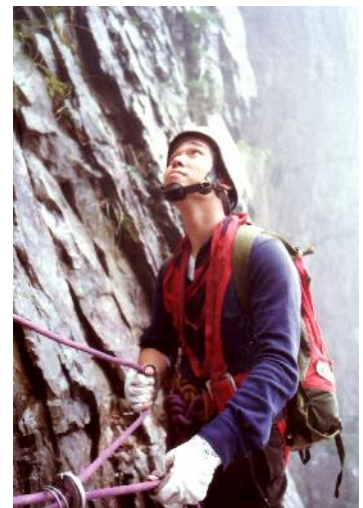
1. 山との出会い

カレーライスの匂いに誘われ高校山岳部に入部したのが私の登山の始まりです。そこで、友人の兄に誘われ鷹取山で初めての岩登りを経験しました。いきなり、アブミを使った人工登攀や懸垂下降に心を躍らせ、木登りや忍者が好きだった私は岩登りの魅力に引き込まれました。高校では岩登りは禁止されていたので、丹沢に沢登りに出掛けるのが楽しみでした。

高校3年生の時に「岩と雪」初代編集長の川崎隆章氏が主宰する「日本登山学校」に所属して、毎週金曜日の夕方に神田の交通博物館へ足を運びました。ここでは、当時日本を代表する多くの登山家が講師として登壇しており、遠征から戻ったばかりで日焼け顔にサンダル履きで足を引きずる小西政継さんの姿は大変強烈でした。日本登山学校では、山学同志会の創設メンバーが実技指導を行っていて、初めての三峠 RCT では、同志会で鬼の伊助と言われた坂口伊助さんがパートナーだったと記憶しています。高校山岳部での登山に飽き足らず日本登山学校での山行がメインになりましたが、遂に岩登りのホンチャンの機会はありませんでした。

2. 早稲田大学「山の会」

山に夢中だったので当然早稲田大学入学も遅れ、浪人中に体調を崩したため暫く山から遠ざかっていました。級友との麻雀漬けの生活にも飽きて、山の会に入会したのは2年生の時でした。年間を通してオールラウンドな登山を行っていた会の雰囲気は大変肌に合い、多くの仲間達と様々な山行を楽しむことが出来ました。特に、岩登りは各学年に必ず何人かの岩屋がいたので先輩、同期、後輩を問わずパートナーに恵まれ思うままに岩登りが出来たのは大変幸運でした。村田先輩と涸沢に定着し、穂高滝谷の主要ルートを集約して登れたのは印象に残る山行のひとつです。在籍中は同期の宮垣や狩野先輩と、一ノ倉沢烏帽子沢奥壁や幽ノ沢に出



烏帽子沢凹状岸壁核心にて、
トップを確保 (1979.8)



幽ノ沢中央ルンゼ終了点にて、左から宮垣、
亀田、会社の同僚 (1979.8)

子沢奥壁や幽ノ沢に出掛け、クライミングを楽しんできました。宮垣と行った烏帽子沢奥壁変形チムニーでは核心部の登攀に手間取り、国境稜線に抜けるころには辺りはすっかり暗くなり、一ノ倉岳の避難小屋で非生産的な話をしながら夜を明かしたのは今となっては掛け替えのない思い出です。

宮垣とは岩登りだけではなく丹沢の沢にもよく一緒に出掛けました。岩場ではあまり怖い思いをしたことはなかったですが、沢ではいろいろなことがありました。エビラ沢 F1 で苔むしたスタンスへの一步が踏出せずフリーズしてしまったこと、悪沢でトラバース中に滑落して瀑心でズブ濡れになったこと、宮垣が滝の途中で身動きが取れずロープで助けたこと、等々様々な思い出があります。

卒業後は後輩達を連れて明星山 RC 合宿、稲子岳南壁、北岳バットレスへ足を運びました。また、宮垣と会社の同僚の 3 人で烏帽子沢奥壁凹状岩壁や幽ノ沢中央ルンゼ、行方先輩に誘われ幽ノ沢中央壁正面フェースに行っています。中央壁ではルートから外れ、少しショッパイ登攀を強いられた記憶は今でも鮮やかです。それでも、足元に広がる幽ノ沢カールボーン



明星山 P6 南壁の対岸にて、左から平井、
亀田、本田 (1978.10)

下部ピラミッドフェースから第四尾根主稜への継続登攀は、充実感と達成感に満ちた思い出の登攀です。何ととっても日本で二番目に高い北岳の頂上に突き上げる登攀はアルパインクライミングの醍醐味に尽きます。そんな訳で現役時代最後の岩登りも、1981 年秋に後輩の藤井と阿形と登った北岳バットレス第四尾根でした。

3. 九州転勤、そして海外駐在

卒業して 4 年目の 1982 年 4 月に九州福岡へ転勤となり、すっかり山の仲間とのつながりも途絶え岩登りの機会は全く無くなりました。その後も海外営業業務、マレーシア駐在と多忙を極め、20 年近く全く山から離れていました。

そんな折、駐在から戻り暫くして大国先輩や上田先輩からスキーに誘われたりしているうちに、徐々に山への想いが戻ってきました。また、上田先輩からインドアクライミングジムに誘われ、日和田山や天覧山での RCT を続けているうちに自然と岩登りを再開していました。この頃から天覧山でのザイルワーク訓練の指導に参加するようになり、現在に至っています。

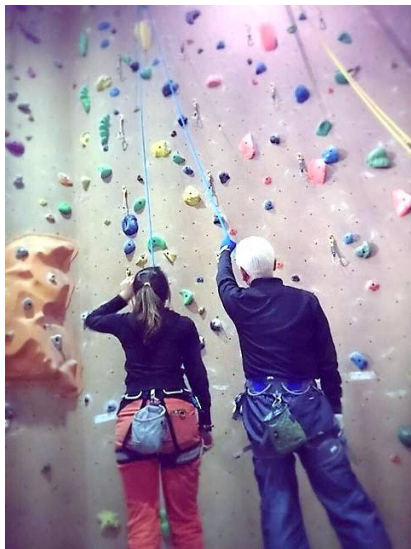


二子山西岳中央稜にて (2016.9)

4. あれから 35 年

定年退職を目前にした一昨年の夏に尿路結石になったのをきっかけに、元気なうちに好きなことをやりたいと思い、本格的にクライミングを再開しました。ジムや奥多摩つづら岩、日和田山での RCT を経て、昨年 9 月に留学生会員の劉さん

と秩父二子山西岳中央稜を登り 35 年ぶりのマルチピッチクライミングを実現することができました。久々のホンチャンで緊張の為なかなかロープが伸びず時間ばかりが過ぎてゆきました。このルートはもともとアルパインクライミングの入門ルートとして有名でしたが、フリークライミングの普及により不要な残置支点が除去され、場所によってはカムデバイス等のナチュラル・プロテクションが必要でした。生憎、持参してなかったため 3 ピッチ目の核心部のクラックでは大変シビア（V+、A0）な登攀を強いられ、ボルトの頭に乗るクラックに靴が挟まれ抜けなくなる事態を乗り越え、何とか核心部を抜けることが出来ました。クライミングシューズの劉さんは、レイバックで難なく核心部を抜けてきました。テラスで劉さんに指摘され靴を履き替え、その後のピッチはクライミングシューズで快適な登攀を楽しみました。愚かなことに往年のクレッターシューズで登攀を試み、左肘負傷出血と本当に痛い思いをしました。何



劉さんと人間ベースキャンプにて

で山屋はいつも頑固なのでしょうか。劉さんにとって初めてのマルチピッチ、当方は 35 年ぶりのホンチャンでお互い緊張のクライミングでしたが、台風一過の青空の下、岩壁を貸切りで登攀できたので、何とも言えない達成感を感じることができました。今でも劉さんとは定期的にジムで一緒に登っていますが、クライミングセンスと度胸の良さで、フリークライミングでは私の及ぶところではありません。今では彼女は信頼できるロープパートナーですが、何よりも後輩が成長してゆくのは嬉しい限りです。

5. これからは

最新の技術や装備、特にクライミングシューズの進化のお陰で、現役時代よりも難易度の高いレベルを登れるようになりました。しかし、年齢からくる体力の低下と判断力の低下は否めません、それでも大好きな北岳バットレスと雨天で敗退した烏帽子沢奥壁中央稜には機会があれば行ってみたいと思っています。

それから、同期の宮垣が丹沢玄倉川で遭難して今年で 20 年になるので、何か思い出になる山行を実施できればと考えています。彼の命日は私の誕生日なので 宮垣のことを忘れたことはありません。西国巡礼ではないですが「同行二人」の気持ちでいつも山に向かっていきます。この稲山会通信が皆さんのお手元に届くころに、丁度宮垣の 20 周忌を迎えます。元気でいる限り、いつまでも山と関わってゆきたいと思っています。

最後になりますが、これからも上田大先輩から引き継いだ岩への想いを、できるだけ多くの後輩たちに伝えて行ければと思っています。

秋のハイキング（奥多摩・浅間嶺）のご案内

4月のハイキングは残念ながら雨天中止となりましたので10月は同じコースで実施します。
秋の一日のびやかで展望の良い山道をOB・現役ともども楽しく歩きましょう。皆様お誘い合わせのうえご参加下さい。

日 時：2017年10月8日（日） 武蔵五日市駅 8：55 集合

集合場所：JR 武蔵五日市駅前 西東京バス停①番（9時発数馬行き）

行 程：武蔵五日市駅～浅間尾根登山口～数馬分岐～人里峠～浅間嶺（登山口からコースタイム 2時間 20分）～休憩所～展望台～時坂峠～払沢ノ滝入口（浅間嶺から 2時間 10分）～武蔵五日市駅
合計コースタイム 4時間 30分

幹 事：新井昭夫（S46年卒） araia@nifty.com 080-1161-5306
松村幹雄（S48年卒） mykof04@s5.dion.ne.jp 080-5175-9695

参加ご希望の方は10月1日迄に上記幹事宛にご連絡下さい



秩父路の石楠花



東北路の水芭蕉

2016年度会計報告（2016年1月1日～12月31日）

稲門山の会

単位：円

項 目	収 入	支 出	残 高	備考欄
前年度からの繰越金（預金・現金計）			3,843,027	
年会費（振込分）	244,000			4,000円 x 61名
年会費（新年会時入金分）	264,000			4,000円 x 66名
新年会会費	468,000			6,000円 x 78名
都岳連共済金還付金	54,388			
Tシャツ代金	6,000			
預金受取利息	26090			郵便定期預金利息
収入合計	1,062,478		4,905,505	残高は繰越金を含む
新年会費用		665,280		大隈会館支払
60周年記念Tシャツ作成費用		81,279		追加作成費用
山の会提灯作成費用		15,552		2基：「山の会」、「稲門山の会」
山の会ペナント作成費用		52,120		大1、小2
東京都山岳連盟年会費		20,000		
稲山会通信印刷費用		40,900		33号、34号
HP管理費用		57,834		ホームページビルダーサービス
新人歓迎ハイク及び徳澤園の学生補助		53,486		新人歓迎ハイク：ジダンゴ山
新人勧誘費用		8,652		サポートOBの交通費補助
新人募集資料代		1,860		新人募集パンフレット
山の会共同装備購入費用		75,724		テント、アイゼン
銀行振込手数料		4,076		
事務局費用		6,172		役員会部屋代、新年会名札費用
事務局費用仮払		100,000		
支出合計		1,182,935		
収支合計	1,062,478	1,182,935	3,722,570	単年度収支 ▲120,457
項目別預金残高内訳書				
一般会計：郵便公社預金			524,706	通帳残高額を確認済
年会費入金振替便口座			1,015,534	通帳残高額を確認済
みずほ銀行口座			167,079	通帳残高額を確認済
特別会計：遭難対策費（郵便定期預金）			1,000,000	通帳残高額を確認済
遭難対策費（みずほ銀行定期預金）			1,015,251	通帳残高額を確認済
預金合計			3,722,570	

上記の会計報告を致します

会計幹事 新井昭夫

（尚、別途会計監事が銀行通帳残高書と照合済です）

訃報

平成 29 年 1 月 26 日に小島俊一さん（S41 年卒）がご逝去されました。
故人を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

本年の総会・新年会でご案内がありましたが、稲門山の会が新体制となり、上田代表（S33 年卒）が退任され、新たに井村副代表（S40 年卒）が代表に就任致しました。上田 OB はかねてより 80 歳になったら代表を降りたいと言われておりましたが、10 年間代表を務められ、81 歳で退任されました。在任中は現役との窓口、OB 会の親睦等、積極的に活動していただきました。上田 OB は相変わらずお元気で、趣味の日舞（名取）、弓道（錬志 5 段）、スキー（一級）に励まれ、インドアクライム、麻雀も現役です。最近は茶道にもたしなむと聞いています。上田 OB は山の会 60 年の歴史そのものであり、各年代の皆様が、それぞれ山行・山行外でお世話になったと思います。本当に有難うございました。山の会 OG の奥様共々、今後ともお元気に活躍されることを祈念しております。

さて今号に投稿「私の岩登り」いただきました亀田 OB（S52 年卒）は、上田 OB の愛弟子で、現在もインドアクライムで上田 OB と一緒にされていると聞いています。亀田 OB には、現役時代の岩登りの思い出と、現在の岩登りを書いていただきました。亀田 OB の岩登りは、過去も現在も一級品で、最近は現役の RCT のコーチとしてもご活躍いただいております。

もう一件の投稿ですが、総会・新年会時に講演をお願いした迫田 OB（S43 年卒）に講演内容を稲山会通信に載せたいとお願いしたところ、大変面白い投稿「夢の 8,000m ライン」をいただきました。迫田 OB は読売新聞の記者として、数々の「日本人登山家の海外遠征」を取材されています。列举してみると、①1982 年 3 月：加藤ウインターエクスペディション、②1984 年：日本山岳会カンチェンジュンガ・トラバース、③1987 年：チベット取材旅行・チョモランマ東の谷、④1988 年：三国友好チョモランマ登山隊、⑤1989 年：山田昇遭難でマッキンレーに、⑥1990 年：ナムチャバルク偵察隊、⑦1991 年：日本山岳会ナムチャバルク第 1 次隊、⑧1995 年：日本山岳会マカルー登山隊等々です。

迫田 OB に日本人登山家で誰が一番強かったか聞いてみたところ、山田昇が体質的に強く、加藤保男はスポーツ的に強く、現役時代は山田が一番強かったが、兩人とも遭難せずにと 10 年登り続ければ、加藤の方が強くなっただろうとのことでした。

迫田 OB と亀田 OB の投稿に感謝しています。

斉藤雄二（S41 年卒）記